

令和 6 年 9 月 24 日現在

機関番号：35408

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00630

研究課題名(和文)ロシア資料による日本語音韻史における音韻化・異音化についての機能論的研究

研究課題名(英文)A functional study of phonology and allophonization in the phonological history of Japanese using Japanese language materials written in Cyrillic script

研究代表者

江口 泰生(EGUCHI, Yasuo)

安田女子大学・文学部・教授

研究者番号：60203626

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文):『レキシコン』に、促音・撥音・長音・二重母音がどのように出現(消失)するかについて論じた。ゴンザ資料の工列音を解釈することで、アイ・オイから転じた工列が母音体系に食い込んで、もともと存在した工列音を口蓋化していったと思われるが、上代日本語でも、ア～エ交替を持つ名詞～情態言から四段～下二段が生じたと考えられ、そのためにエ乙が母音体系に割り込んだと考えた。これと同じように、開音が狭まって合音に接近し、合音が逃げるためにウ段化したり、イ段化したいする状況を、通時的、方处的に、動的に解明した。またこの研究から副次的に中村柳一という人物が開合研究史の与えた影響を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

タタリノフ『レキシコン』は江戸時代の下北方言を反映する資料として貴重であり、早急に翻字翻訳および注釈が完成させることが望まれている。これによって江戸時代の下北方言が分かるので、郷土の財産となり、その社会的意義は大きいと思う。また開合の区別が新潟長岡に残っていたということを報告した中村柳一という人物の事蹟を明らかにし、長岡高校同窓会から会報にその要旨を掲載したいという要望があった。以上は直接的な社会的意義である。

また開音と合音とウ段音の関係を機能負担量、通時的観点、方处的観点から分析したが、これまで解釈できていなかった点を明らかにしたことは大きな意味があると思う。

研究成果の概要(英文): In the vocabulary dictionary "Lexicon," I discussed how geminated consonants, glottal stops, long vowels, and diphthongs appear (and disappear). By interpreting the e sounds in the Gonza materials, the e sound that evolved from ai and oi entered the vowel system. This is the reason why the originally existing e sounds became palatalized. In Old Japanese, the alternation of the a sound and the e sound gave rise to four-stage verbs and lower two-stage verbs. This caused the e sound to break into the vowel system. In the same way, the au sound narrowed and approached the ou sound, and as the ou sound escaped, it became the u-stage or i-stage. I dynamically explained it diachronically, methodologically, and dynamically. I clarified the influence of a person named Nakamura Ryuichi on the history of dialect opening and closing research.

研究分野：日本語学

キーワード：ロシア資料 レキシコン タタリノフ ゴンザ 特殊拍 開合 上二段動詞 下二段動詞

# 科研費「ロシア資料による日本語音韻史における音韻化・異音化 についての機能論的研究」成果報告書

## 1、研究開始当初の背景

共時態として、数を数え、項目を羅列するような音韻観に対して、それでは音韻変化がなぜ生ずるのかを説明できないのではないかと考える。共時態として描いた構造の中に、動的要因があるのだという考えはA. マルティネやコセリウなどにもあるが、過去の日本語においてもそのような態度は必要ではないかと考えていた。音韻変化を考えると、2つの音韻が異音化したり、1つの音韻が異音化という過程を経て、2つの音韻として独立するというような動的変化である。それらの原因として「異音」の介在を考えるようになった。

## 2、研究の目的

そこで本研究の目的は2つある。その1. 音韻の数が増える場合、異音が音韻に変化することがあるのではないか。たとえば、長音は感動詞・オノマトペなどの周辺語彙に存在し、これが漢語、和語へと使用範囲を拡大させた。このようなパターンは「異音の音韻化」と呼べると思う。次に音韻が減る場合、2つの音韻だったものが合流して、一度、異音関係になる過程を経るのではなからうか。「音韻の異音化」と呼べると思う。

その2. 「異音の音韻化」において、なんらかの機能が働くのか、働く場合、どのような機能を認めるかという点である。これを明らかにすることが説得力を増すのだと思う。逆に「音韻の異音化」は弁別機能を喪失するのであるが、それを代替するような機能の獲得が行われたのであろうか。機能的な面から説明できないものかと模索している。

## 3、研究の方法

音韻が異音の分布をしているという指摘は既にあって、『和名類聚抄』における「衣」「江」や(馬淵和夫『国語音韻論』)、ゴンザ資料のオ( )とヲ( )などが語頭と語中・尾で相補分布している(迫野虔徳『文献方言史研究』)という先行研究がある。

これらはもともと2つの音韻である単音が合流するタイプである。これとは別に、もともとは連母音で別個に存在した音韻が合流するタイプがある。一つはゴンザ資料の二種類のエ列である。もともとのエ列とアイ・オイから転じたエ列の区別がある。アイ・オイから転じたエ列には書いて>ケテ、咲いて>セテ、のような音便形が多くを占め、それがもともとのエ列を狭めている。また開合の合流などは漢語の語彙が関わっているように思われる。さらに上代特殊仮名遣いのエ列音甲乙は文法的にもかなり異なっている。こうしたものは語彙的差異、文法的差異などがあって、形態音韻的な要素を持って

いるとも言える。

#### 4、研究成果

ゴンザの工列音と同じような分布が上代にもあったのではないか。音便形ではないが、上代にはア～エ交替がある。工列乙類には複合によって生じたものがかなり多い。さて動詞の生成には、活用がどうやってできたかという問題、動詞の元となるものをどこから供給するかという問題、そして動詞の元がどういう活用に割り振られるかという問題などがあると思う。ゴンザの工列音のありようと、上代のア～エ交替との対照から次の成果を得た。

令和3年3月 2021.3「ロシア資料と上代特殊仮名遣工列音 - 下二段動詞の場合 - 」(『筑紫語学論叢』風間書房、pp.136-162)

この論文では、四段と下二段はア～エの母音交替によって得られる名詞～情態言から供給されていると考えた。そしてア段をもつものが四段へ、エ乙を持つものが下二段へ割り振られたと考えた。意味の相違ももともと名詞なのか、もともと情態言なのかに連動しているとした。エ乙の多くを占める下二段は、その際、もともと存在した母音体系にエ乙が割り込んだために、もともとの工列を狭めていると考えた。もともとの工列が口蓋化して狭まっていることになる。引き金となった現象はゴンザの場合、動詞の音便であり、上代語の場合は動詞の供給元であり、異なっているが、そこから最終的にはもともとの工列と割り込んできた工列とは異音関係になっていったものと考えた。共時態から通時的变化を探る方法の実践として取り組んでみたものである。

これに対して、上二段の特徴は著しく属性や状態を表す意味に偏っているという点であった。このことから動詞の供給元となるものは情態言であり、特にオ乙オ乙の情態言を供給元とするものが多いのではないか、そのためにオ乙を語幹に持つ動詞が多いのではないか、オ乙～イ乙の母音交替によって上二段に割り振られたのではないかと考えた。そしてその傾向は平安以降も引き継がれていると主張した。その成果が次である。

令和5年1月 2023.1.31 「上二段動詞の成立と展開(覚書)」(単著)6頁 『安田国語国文論集』第53号 pp.1～pp.6

開合について、開音と合音を母音体系に位置づけ、広いオと狭いオを認めるという共時的な、かつ構造主義的な見方もあり、またその音価を探究する研究もある。服部四郎など。この研究ではそうした捉え方を踏まえ、さらに開音と合音の所属語彙の量の多寡という機能負担的な観点を導入し、ウ段音のオ段化という現象について、共時的な断片ではなく、通時的な動態として捉え、さらにまた言語地理学的な視点を導入することで、開音と合音の合流をダイナミックに捉えてみようとした。その成果が次である。

令和3年6月 2021.6「東国文献の開音・合音・ウ段音」(『語文研究』130・131合併号、pp.1～15)

このような捉え方をすることで、開音と合音の機能負担量はサ行において非常に大きく、他の行では著しく少ないことが分かった。次表参照。

開音	キヤウ	130	130	シヤウ	203	203	チャウ	95	95	ニヤウ	0	0	ヒヤウ	24	24	ミヤウ	33	33	ヤウ	23	23	リヤウ	26	26
合音	キヨウ	38		シヨウ	30		チヨウ	12		ニヨウ	5		ヒヨウ	3		ミヨウ	0		ヨウ	12		リヨウ	6	
	ケフ	4	68	セフ	1	95	チフ	12	69	ネフ	0	7	ヘフ	0	17	メフ	0	11			12	シフ	0	17
	ゲウ	26		セウ	64		テウ	45		ネウ	2		ヘウ	14		メウ	11					レウ	11	
ウ段	キユウ	14		シユウ	25		チュウ	83		ニユウ	0		ヒユウ	0		ミユウ	0		ユウ	7		リユウ	24	
	キフ	16	63	シウ	19	106	チウ	6	89	ニウ	2	46	ヒウ	0	0	ミウ	0	0			7	リウ	18	42
	キウ	33		シフ	62		チフ	0		ニフ	44		ヒフ	0		ミフ	0					リフ	0	

そのために、サ行で特に開音が合音に近づき、合音はウ段に逃げ、さらにイ段化したり、逆にオ段化したりするという現象を引き起こしていることが分かった。他の行ではさほど抵抗なく、容易に合流していることも分かる。その調査結果一覧が以下である。

(表1) 元龜二年京大本『運歩色葉集』の場合(1571年、関東口)

(キウ)	(シウ)少	(チウ)	(ニウ)	(ヒウ)	(ミウ)	(ユウ)	(リウ)	もともとオ段(上が)
(クウ)	シヨ(シヨ)	(ツウ)		(フウ)	(ムウ)		(ルウ)	拗長音)
	<u>シュウ(セウ)</u>							もともとウ段
	シュ(シユ)							(下が拗短音)

(表2) 米沢本『沙石集』の場合(室町中期~江戸初期、山形県米沢)

キョウ(キウ)	シヨウ(シウ)	チョウ(チウ)	ニョウ(ニウ)	リョウ(リウ)	もともとオ段
ウ)	シヨ(シユ)				
	<u>シュウ(セウ)</u>				もともとウ段
	シュ(シヨ)				(下が拗短音)

(表3) 『天正狂言本』(1573~1593年、仙台或いは米沢)

キョウ(キウ)	シヨ(シユ)	チョウ(チウ)	ヒョウ(ヒウ)	ミョウ(ミウ)		オ段(拗音)
キョ(キフ)					ヨウ(ユフ)	(拗音、短音)
						(直音)
	<u>シュウ(セウ)</u>	<u>ツウ(トウ)</u>				もともとウ段
	シュ(シヨ)					(下が拗短音)

(表4) 米沢本『倭玉篇』(室町末期から江戸初期、米沢)

キョウ(キウ)	シヨウ(シユ)	チョウ(チウ)	ヒョウ(ヒウ)	ミョウ(ミウ)	ヨウ(ユウ)	もともとオ段
	<u>シュウ(セウ)</u>	チュウ(テウ)			<u>ユウ(ヨウ)</u>	もともとウ段
	シュ(シヨ)					(下が拗短音)

(表5) 三矢重松の場合(明治・大正期、山形県庄内)

キョ(キユウ)			ニョ(ニユ)	ミョ(ミユウ)		もともとオ段
---------	--	--	--------	---------	--	--------

	<u>シュウ(シヨウ)</u> <u>シュ(シヨ)</u>	<u>チュウ(チヨウ)</u>		<u>リュウ(リョウ)</u>	もともとウ段 (下が拗短音)
--	----------------------------------	-----------------	--	-----------------	-------------------

また時代によって開音と合音の合流が行によって異なっていて、次第に拡大していることも分かった。こうして、共時的な解釈よりもよりダイナミックな言語変化を捉えることが出来たのではないかと思われる。

さらに、この研究のために、方言の開合研究史を調べている過程で、新潟市長岡で開合の区別を報告した中村柳一の事蹟を明らかにすることもできた。本研究を遂行するにつれて、どうやって異音に気づくのであろうか、という点を考えていたが、音声的な理由以外に、方言との接触、外国語との接触、社会言語的な接触などがあると考えていた。この中に、中村柳一のように海外に出て帰国することによって自身の方言を相対化するという具体例も加えることが出来た。その成果が次である。

令和4年3月 2022.3 「方言開合研究史 中村柳一のこと」(『岡大國文論稿』50) 18~27頁

中村柳一は、明治19年(1886.4.26)新潟県刈羽郡高田村堀2324(現柏崎市堀2324)にて誕生。明治40年(1907.3)高田師範学校卒業。明治40年(1907.3)小学校教員免許状、取得。明治40年(1907.3)高田師範学校、訓導。大正元年(1912.9)新潟県中頸城郡金谷村大貫尋常小学校、訓導・学校長。大正3年(1914.12)検定試験合格により師範学校中学校高等女学校の教員免許状を取得(国語及漢文科)。大正4年(1915.4)富山県立魚津中学校、教諭。大正6年(1917.9)台湾総督府国語学校、助教、国語。大正8年(1919.4)台北女子高等学校普通学校、教諭、国語・漢文科。大正9年(1920)『台湾教育国語必携』(藤井常登・中村柳一共著、台湾新高堂書店)。大正11年(1922.3)新潟県長岡中学校教諭。大正13年(1924.7)就職斡旋の希望に対する西巻南平(台南師範学校)からの返信。昭和2年(1927年4月12日)音声学協会「第1年大会」出席。昭和2年(1927年5月)音声学協会会報に「越後地方の[ɔ̃]について」掲載。昭和4年(1929.5)新潟県長岡中学校教諭を転任。昭和4年(1929)高田中学校へ転任。昭和12年(1937)三条中学校へ転任。昭和47年(1972.11.28)没。

ところで橋本進吉の開合研究は「国語音韻史の研究(昭和二年度)第七章「室町末期から現代に至るまでの音声の変遷」(四)の「才段の長音」(昭和二年度は1927年)で著しく進展した。注目すべきことは、「越後長岡の附近一帯の地には区別が残つて居る」と書いていることで、これは中村柳一の研究の影響を受けたものと思われる。

以上のうち、「東国文献の開音・合音・ウ段音」と「方言開合研究史 中村柳一のこと」は九州方言研究会でリモート口頭発表することができた。

以上の研究はそれまで積み重ねてきた研究に深みをもたらし、今後の積み重ねに示唆を与えることとなった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 6件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 江口泰生	4. 巻 53
2. 論文標題 上二段動詞の成立と展開（覚書）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 安田国語国文論集	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 江口泰生	4. 巻 3
2. 論文標題 ロシア資料と上代特殊仮名遣工列音 - 下二段動詞の場合 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『筑紫語学論叢 』	6. 最初と最後の頁 pp.136-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 江口泰生	4. 巻 74号
2. 論文標題 A. タタリノフ『レクシコン』注釈10（文例集1）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『岡山大学文学部紀要』74	6. 最初と最後の頁 pp.57-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18926/okadai-bun-kiyou/63065	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 江口泰生	4. 巻 130・131合併号
2. 論文標題 東国文献の開音・合音・ウ段音	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『語文研究』	6. 最初と最後の頁 pp. 1 ~ 15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 江口泰生	4. 巻 50号
2. 論文標題 方言開合研究史 中村柳一のこと	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『岡大国文論稿』	6. 最初と最後の頁 pp.18-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 江口泰生	4. 巻 1
2. 論文標題 タタリノフ『レクシコン』の特殊拍	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『坂口至教授退職記念 日本語論集』創想社63-86)	6. 最初と最後の頁 63-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江口泰生	4. 巻 1
2. 論文標題 「ロシア資料と上代特殊仮名遣工列音 - 下二段動詞と四段動詞 - 」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『筑紫語学論叢』風間書房、136-162)	6. 最初と最後の頁 136-162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江口泰生	4. 巻 高山・辛島退任記念
2. 論文標題 2021.6「東国文献の開音・合音・ウ段音」(『語文研究』)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語文研究	6. 最初と最後の頁 0
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 江口泰生
2. 発表標題 東国文献の開音・合音・ウ段音
3. 学会等名 (リモート) 九州方言研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 江口泰生
2. 発表標題 「東国文献の開音・合音・ウ段音」
3. 学会等名 2021.1.9(土)(リモート) 九州方言研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 筑紫日本語研究会	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 518
3. 書名 筑紫語学論叢	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件



8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------